



Title	「テハ」条件文の制約について
Author(s)	塩入, すみ
Citation	阪大日本語研究. 1993, 5, p. 67-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9642
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「テハ」条件文の制約について

On the constraints of TEWA

塩 入 す み
SHIOIRI Sumi

キーワード：順接条件，反期待性，蓋然性，当然，独立度

1. 問題のありか

いわゆる順接条件と言われる「テハ」節の構文の特徴および制約については、従来さまざまな記述がされているが、それらをまとめると、以下の3つに集約されるだろう。

①主節に、「望ましくない」（森田・松木1989）、「原則として反期待性の意味内容」（蓮沼1987）を表すものが多い。

- (1) a. 曇っては、何も見えないでしょう。
b. *晴れては、星も見えるでしょう。

上の例で、(1a)の主節の「何も見えない」ことは「望ましくない」事態なので「テハ」を使えるが、(1b)の「星も見える」ことは「望ましい」事態なので「テハ」は使えない。

②主節に過去の1回の出来事を表すことができない。

- (2) a. *たくさん飲んでは体にさわりました。（仁田1982・下線塩入）
b. 毎日その店に行ってはコーヒーを飲んだ。〈²⁾反復動作〉

上の例で、(2a)は主節の「体にさわった」ことが過去の1回の出来事なので「テハ」は使えないが、(2b)で「コーヒーを飲んだ」ことは過去の出来事ではあるが反復動作なので1回の出来事ではない。

③主節には、命令、依頼、勧誘、意志、希望、願望を表すことができない、または表しにくい。以下、順にそれぞれ例をあげておく。

(3) こんなに雨が降っては、{ *中止にしろ / *中止にしてください / ?中止にしましょう / ?中止にしよう / ?中止にしたい / *中止になれ }。

①～③の特徴、制約にはいくつか問題点がある。まず、①の、後件が「望ましくない」という点については、必ずしもそうではないこと（蓮沼1987の「意外性」による説明など）も指摘されているが、以下のような例もあり、どのような場合に「望ましくない」事態を表さないのかが問題になる。

(4) a. 女の子に誉められては、悪い気はしない。
b. 敵も準備を進めていると聞かされては、負けられない。

②については、以下のような例が問題になる。(5a)の「こたえた」ことや(5b)の「避けようがなかった」ことはいずれも過去の1回の事態である。

(5) a. 「急がば回れ。」とさとされ、「話し上手の聞き上手。」と憎まれ口を聞かされては、普通の言葉以上に聞く耳にはこたえたにちがいないりません。(森田・松木1989・下線塩入)
b. そうした少年に死角からいきなりとび出されては、どんな運転手でも避けようがなかった。(官)

また、③については、③にあげたタイプではない「述べ立て」(仁田1991)の文でも、

(6) そこに行っては、手掛かりを { *つかまない / つかめない }。

のように不適切な場合があり、因果関係の表され方にもさまざまな制約があると考えられるが、今回はまだ考察が及ばないので、②の制約に関係して少し触れるにとどめる。

以上のような問題をきっかけとして、本稿では「テハ」条件文の①②の制約を中心に考察することにする。なお、後述するように「テハ」条件文にどのようなタイプの前件まで含めるかは問題であるが、今回は「動作性述語文+テハ」を中心に、「トアッテハ」「ノデハ」「名詞+デハ」のような形式もその都度視野に入れ、必要に応じて言及することにする。

2. 主節の事態の「反期待性」

まず、①の問題としてあげた、「テハ」条件文の主節が「反期待性」を表さなくてもいい場合は以下のようにまとめられる。

(i) <原因となる事態が受け身の意味を持つ⁴⁾>

原因となる事態に受動態(7b)や「テモラウ」(7c)などを用いて主節と「テハ」節の主格を一致させると因果関係が強まり、「当然」の意味を表しやすくなる。

- (7) a. *女の子が誉めては、ぼくだってうれしい。
 b. 女の子に誉められては、ぼくだってうれしい。
 c. 女の子に誉めてもらっては、ぼくだってうれしい。

(ii) <原因となる事態の程度が甚だしい>

これは蓮沼1987が「意外性」という特徴で説明している。「テハ」節の事態の程度が甚だしいと、主節の事態を引き起こしやすく、結果となる事態の起こる可能性は高くなる。たとえば、(8)のように、「テハ」節に程度性を表せる形容詞や程度の甚だしさを表す「コンナニ」などを用いると、主節には望ましい事態も表すことができる。

(8) こんなにお若くっちゃ、まだ結婚なさらないのも一向不思議はないですな。(蓮沼1987・下線塩入)

(iii) <原因となる事態が知識の獲得を意味する>

「テハ」節の事態が「～ト聞ク」「～ト知ル」「トイウ情報ガ入ル」「～ヲ目ニスル」のように、何らかの知識を得た意味を表す場合、話題を提示する「～トアッテハ」に近くなる。以下、2つ例をあげる。

- (9) a. …うちの系列校である滋賀大学や三重大学あたりまで出かけて、縄張り荒らしをしているという情報が入って来ては、われわれだって洛北大学の名誉にかけて負けられないではありませんか。(続白)
- b. あれだけ大きな魚を目にしては、見逃せない。

「～トアッテハ」の後件の事態には、以下の(10)のように、「望ましくない」という制約はない。(蓮沼1987では、「トナッテハ」「ト云ッテハ」の例をあげ、この場合の前件と後件は「直接因果関係を結ばない『外的な関係』に変化しているため、通常もつ意味的な制約から自由なのだ」としている。)

- (10) 「財前先生には、長男の嫁や長女のお産と、何から何までお世話になり、それだけにうちの家庭の事情がよう解って戴いている上に、お縁談の相手が浪速大学の財前教授のお弟子さんとあっては、安心です。」(続白)
- (→と聞いては)

(iv) <結果となる事態が可能表現の否定である>

動作主にとって望ましくない意味を持つ動詞の中には、可能形の否定が「～スルワケニハイカナイ」の意味に近くなるものがある。たとえば、「負けラレナイ」((9a)), 「見逃セナイ」((9b)), 「破レナイ」((11a)), 「失敗デキナイ」((11b)) など、他に「引キ下ガレナイ」「乗り遅レラレナイ」「落トセナイ」「マチガエラレナイ」などが考えられる。これらは可能表現の否定が、「～スル」のを避けるのが当然であることを意味することができる。

(11) a. 母親に約束しては, 破れない。

b. 試験場に親が来ては, 受験生も失敗できない。

(iii) のような例から、「テハ」条件文の特徴を記述する際、どのようなタイプの前件まで「テハ」条件文として含めるかによって、「反期待性」という意味づけが限定されることがわかる。野田1992が指摘するように「ノデハ」「名詞+デハ」や、蓮沼1987が「意外性」によって説明している「形容詞+テハ」節の場合も、主節が「反期待性」を表すとは限らない。この場合主節は当然の意味を表す。もし、「テハ」節を句や話題化のようなレベルまで考え、(iv) のような例をも説明するとすれば、「テハ」条件文の主節の意味特徴として「反期待性」だけではカバーできなくなる。

3. 主節の蓋然性について

はじめに問題点としてあげたように、反復の用法も含めて、「テハ」条件文の主節には一回の過去の事態を表しにくいのが、以下の2つの場合は表すことができる。

(i) 主節の事態が「判断のモダリティ」(仁田1991)に関わる形式を取る。

(12) あんなに雨が降っては, 中止に {なる/*なった/なっただろう}。

「テハ」条件文は前件の事態から後件の事態を推量するものであり、後件の事態は確認されていない不確かな世界のものであるから、後件が「ダロウ」を取ったり、蓋然性を意味すると適切になる。後件の述語の非過去形は未然の事態であるために事態の生起することへの不確かさを意味的に含めるので適切だが、動작성述語の過去形は既然の事態であるために事態の生起することへの不確かさを最も意味しにくいので不適切である。

また、主節が非過去形の場合も、「テハ」条件文での推量は話し手の確実な知識を根拠とするものなので、「推論の様態」(仁田1991)に関わる「ハズダ」は取れる。「徴候の存在の元での推し量り」(仁田1991)を表す「ラシイ・ヨウダ・ミタイダ」は主節に取ることはできるが、(13b)のように推量の根拠となる何らかの徴候(「運営委員が相談している」こと)が文中において顕在的に存在することを必要とする。しかし、徴候「(シ)ソウダ」は推量の根拠が話し手の内的感覚のみでも可能である((13c))。

- (13) a. こんなに雨が降っては、中止になる {?らしい / ?ようだ / ?み
たいだ}。
 b. 運営委員が相談しているし、こんなに雨が降っては、中止になる
{らしい / ようだ / みたいだ}。
 c. こんなに雨が降っては、中止になりそうだ。

また、話し手の確実な知識を根拠としているため、主節の形式は蓋然性の高さを表す「ニチガイナイ」の方が、低さを表す「カモンレナイ」よりも適切だが、「モンカスルト」などがあれば「カモンレナイ」も可能である⁵⁾。

- (14) あんなに雨が降っては、大会は中止になった {にちがいない / ?か
もしれない}。

(ii) 主節が否定を含む一定の形式を取る。

この形式には、以下のようなものがある。

A：唯一の可能な事態であることを表す形式

(セザルヲ得⁶⁾ナイ、スル他(ハ)ナイ、スルシカナイ、シナケレバナラナイ)

B：蓋然性(可能)を表すことができる形式(シカネナイ)

C：不可能な事態であることを表す形式(シヨウガナイ)

D：蓋然性(不可能)を表すことができる形式(シッコナイ、スルワケガナイ)

それぞれ1つずつ例をあげておく。

- (14) a. あんなに雨が降っては、大会は中止するしかなかった。(A)
 b. あんなに雨が降っては、大会は中止になりかねなかった。(B)
 c. あんなに雨が降っては、大会は実行しようがなかった。(C)
 d. あんなに雨が降っちゃ、大会は実行しっこなかった。(D)
 (~~~~は当該の事態、____は否定を含む形式)

A, Cのタイプの形式は、その承接する事態が原因から生じる唯一の結果であり、当然の結果であることを意味する。たとえばAの(14a)で「中止スル」ことは「雨が降ル」という原因から生じる唯一の結果であり、他の結果が排除されれば因果関係は必然的なものとなり、「当然」の意味を表すことができる。B, Dのタイプは、「得ル」に類する(Bは「得ル」Dは「得ナイ」)と考えられる形式で、蓋然性を表せるため過去形でも適切である。B, Dは(i)の「判断のモダリティ」形式に準ずるものと考えられる。

(iii) 主節の事態が可能表現の否定である。

- (15) a. 君に出ていかれちゃ、飯のしたくも {*しなかった/できなかった}。
た。

b. 子供になかれちゃ，本も { * 読まなかった / 読めなかった }。

はじめに③の問題として，

(6) そこに行っては，手掛かりを { * つかまない / つかめない }。

のような例をあげたが，可能表現はそうでない動詞より，また否定は肯定よりも原因・理由の必須性が高いため，結果が「当然」の意味を持ちやすいのであろう。たとえば，「会議で休む」よりは「会議で休める」の方が，また「研究会で会わない」よりは「研究会で会えない」の「デ」格の方が理由として解釈しやすい。これは，可能表現においては事態を可能にした原因が，否定においては事態の実現を阻んだ原因が，ただの動作を実現にいたらしめる原因よりも必須であり，因果関係が強いということであろう。

「テハ」条件文に表される因果関係は，因果関係が強いもので，その強さの表され方には様々な方法がある（たとえば主節に蓋然性を表す形式をつけるとか，前件・後件の主格を一致させるなど）と考えられるが，可能表現の否定もその1つであると言えるだろう。

ここまでで，「テハ」条件文の主節は，蓋然性を表すものでなければならず，その蓋然性は「当然」という話し手の知識にもとづく程度の高いものであると言える。

なお，先に見た話し手の「反期待性」と蓋然性の高さとは，発話による効果とでもいうべきものを考えれば密接な関係がある。未然の事態は避ける必要があるし，起きてしまったことならなぜ避けなかったのかを説明する必要があるし，その因果関係が必然的だと述べることで，禁止や忠告，言い訳やあきらめといった行為や態度はより効果的に達成，表現されることになる。

4. 節の独立度

ここでは，「テハ」節の独立度を測ることで，複文における位置づけを

しておきたい。節の独立度を測る基準は、南1974、田窪1989で提案、修正されているが、南らの用いたいくつかの基準を条件を表す「テハ」節に用いてみると以下のようになる。

①<評価の副詞を含めるか>「不幸ニモ、残念ナコトニ」のような評価の副詞を含めるものは独立度の高いC類である((16))が(17a)のように「動作性述語+テハ」では含みにくいが、「ノデハ」((17b))「トアッテハ」((17c))では含める。

(16) [不幸にも両国は分割されるだろうから]、来年には世界情勢も変わるだろう。

(17) a. ? [不幸にも両国が論争ばかり続けては]、事態はますます悪化するだろう。

b. [不幸にも両国が論争ばかり続けていたのでは]、事態はますます悪化するだろう。

c. [不幸にも両国が論争ばかり続けていたとあっては]、事態はますます悪化するだろう。

(〔 〕は一つの節を表す。)

②<「ダロウ」を含めるか>「ダロウ」を含めるのは、C類である((16))が、「ダロウ」は形態的に「テハ」に含めない(「*ダロウテハ」)。他のモダリティ形式はその蓋然性の不確かさを原因としたり((18a))、「ノデハ」((18b))にしないと含みにくく、また形式により違いはあるが、一応含める。これは独立度の低い「タラ」のようなB類の場合((18c))と同様である。

(18) a. 中止になる {?かもしれないじゃ/はずじゃ/らしくじゃ/ようじゃ/みたいじゃ}、困るね。

b. 中止になる {かもしれないんじゃ/?はずなんじゃ/らしいんじ

ゃ／ようなんじゃ／みたいなんじゃ}, 困るね。

- c. 中止になる {かもしれない／?はずだったら／?らしかったら／ようだったら／みたいだったら}, 困るね。

③<不定詞を含めるか>C類は不定詞を含めない ((19a))。「テハ」は形態的に「ハ」を含んでおり、「何ハ」「イツハ」と言えないのと同様に不定詞は含むことができない ((19b) ただし対比の「ハ」では可能である)。これは条件節であるB類の「ト・バ・タラ」((19c))とは異なる点である。

- (19) a. * 何があるだろうから, 試合は中止になるんですか?
 b. * 何があっては, 試合は中止になるんですか。
 c. 何があったら, 試合は中止になるんですか。

④<疑問の焦点になれるか>C類は疑問の焦点になりにくい ((20a)) が、B類の「カラ」や「ト・バ・タラ」は焦点になることができる ((20b) (20c))。 (20d) のように「テハ」節は焦点になりやすく、これが (20c) のような条件節とは異なる点である。

- (20) a. A: [彼が来るけれども], 出席しますか。
 B: * いいえ, 彼女が来るけれども。
 b. A: [彼が来るから, 出席する] んですか。
 B: いいえ, 彼女が来るから。
 c. A: [彼が {来ると／来ればば／来たら}] 困りますか。
 B: いいえ, 彼女が {?来ると／来ればば／来たら}。
 d. A: * {彼が来ては] 欠席しますか。
 B: * いいえ, 彼女が来ては。

ただし 「テハ」の条件文が「テハイケナイ・ダメダ・困ル」のような禁止を表す形式に近づくほど、単文に近くなり、疑問の焦点になりやすくな

り、不定詞も入りやすくなる。

(21) a. [彼が来ちゃ困る] の？

b. [入院中は何をしちゃいけない] の？

また、「トアッテハ」のような主題化の形式に近い「テハ」では勧誘に近い疑問文が可能である ((22 a)) が、これはC類 ((22 b)) と似ている。

(22) a. 彼が来ると聞いては、休みますか。

b. 彼が来るだろうから、休みますか。

⑤<どんな節を含めるか>各階層の下位の節は上位の節を含むことはできない。たとえば、B類の「タラ」節はC類の「カラ」節を含めない ((23 a))。「テハ」は条件節は含みにくい ((23 b)) ようだが、「ノデハ」 ((23 c)) や「名詞+デハ」 ((23 d)) 「トアッテハ」 ((23 e)) は含める。他のB類「テ (理由・時間)」 ((23 f)) などは含めるので一応B類までは含めるとしておく。

(23) a. * [[雨が降るだろうから] 中止になっては]、練習が台無しだ。

b. ? [[雨が降ったら] 中止になっては]、練習が台無しだ。

c. [[雨が降ったら中止になるの] では]、練習が台無しだ。

d. [[雨が降ったら中止] では]、練習が台無しだ。

e. [[雨が降ったら中止する] とあっては]、練習が台無しだ。

f. [[遊びに行って] 事故を起こしては]、なんにもならない。

しかし、C類の「カラ」や「ケレドモ」は含めない ((24 a))。やはり、「ノデハ」 ((24 b)) 「名詞+デハ」 ((24 c)) 「トアッテハ」 ((24 d)) にすると含める。

- (24) a. * [雨が降るけれども実行しては], 子供たちがかわいそうだ。
 b. [雨が降るけれども実行するのは], 子供たちがかわいそうだ。
 c. [雨が降るけれども実行では], 子供たちがかわいそうだ。
 d. [雨が降るけれども実行するとあっては], 子供たちがかわいそうだ。

以上から、「テハ」は①②⑤の基準では、節の内部に「ダロウ」や評価の副詞類やC類の節を含めず、B類であるが、③④の基準では、不定詞を含めず、疑問の焦点になれないので、C類ということになる。

ところで、「テハ」節の、不定詞を含めず、疑問の焦点になれないという特徴は、「(節)+ノ/コト+ガ+形容性述語/名詞性述語文」(例:「彼が来るのが明らかだ」)のようなタイプの補足節を主題化した節(以下「主題節」と呼ぶ)と同じである。田窪1989が指摘しているように、このタイプの節にもA、B類の2種があり、A類はテンスの対立がなく一般的行為を表す(例:「運動するのは体にいい」)が、B類はテンスの対立があり、特定の事態を表す(例:「彼が来たのは明らかだ」)。

B類の主題節を上基準で測ると、「ダロウ」、評価の副詞類を含めず((25)(26))、「ハ」があるため不定詞を含めず((27)、ただし対比の「ハ」は含める。)、主題的位置にあるため疑問の焦点になれず((28)これも対比の「ハ」なら可能である。)、A類と違って動作主を「ガ」格で明示することができる((29))。ただ、B類の副詞節と違ってC類を含める((30))。

- (25)? [中止になるだろうことは] 明らかだ。
 (26)* [驚いたことに中止になることは] 明らかだ。
 (27)* [何が中止になることは] 明らかですか。
 (28)A: [運動会が中止になることは] 明らかなんですか?
 B: ?いいえ、遠足です。/いいえ、まだわかりません。
 (29) a. [太郎が来ないことは] 明らかだ。(B類)
 b. [散歩するのは] 体にいい。(C類)

(30) [晴れているが中止になることは] 明らかだ。

以上をまとめてみると、以下の表のようになる。

<表>

	「テハ」	副詞節 B類/C類		主題節 (B類)
①評価の副詞を含めるか	?	×	○	×
②「ダロウ」を含めるか	×	×	○	?
③不定詞を含めるか	×	○	×	×
④疑問の焦点になれるか	×	○	×	×
⑤どんな節を含めるか				
A類：継続のナガラなど	○	○	○	○
B類：ト、バ、タラなど	○	○	○	○
C類：ガ、ケレドモなど	×	×	○	○

以上から、条件の「テハ」節は、⑤のC類を含めるかという基準を除けば、B類の主題節とほぼ似た性質を持っていることがわかる。従って、「テハ」節は、独立度から言うとB類の主題節に近いが、主節の状況を表すという点では副詞節でもあり、主題節と副詞節の両面を持つと言えよう。

なお、反復の用法での「テハ」節は、以下のようにB類の「タラ」のような条件節を含みにくい((31))が、「テ(時間・理由)」は含める((32))。不定詞は含みにくく((33))、疑問の焦点にはなれない((34))。

(31) ? [[そこに行ったら] コーヒーを飲ん] では] 仕事を完成させた。

(32) [[そこに行って] コーヒーを飲ん] では] 仕事を完成させた。

(33) ? [どこに行っては] 新聞を読んでいたの？

(34) A : [お店に行っては新聞を読んでいた] の？

B : ?いいえ、学校に行っては。

従って、反復動作を表す「テハ」も条件の「テハ」と独立度に関する性質は同じと考えてよさそうだ。

以上から、「テハ」節全体を独立度から見ると、条件の「テハ」節の独

立度はB類の主題節に近く、さらに、反復の用法での「テハ」節も条件の「テハ」と同じ独立度であると考えられる。また、「テハイケナイ」のような禁止を表す形式に近づくほど「テハ」の構文は単文に近づき、「ノデハ」「名詞+デハ」や「トアッテハ」に近い形式では、「動作性述語+テハ」よりもC類の性質が強くなる。

5. ま と め

以上、「テハ」条件文の特徴のいくつかを見てきたが、「テハ」節は話し手の確実な知識を提示し、そこから結果を推量するというもので、その蓋然性は程度の高いものである。主節における意味的な「当然」とか「蓋然性の高さ」といった特徴は、「テハ」節が話し手の確実な知識ともいえるべきものを表すからであろう。

また、文の独立度から見れば、条件の「テハ」節は南1974・田窪1989の階層構造のB類の補足節を主題化したものに相当し、B、C類、そして名詞節、副詞節の両面を持つと言える。従って「テハ」条件文の「ハ」は主題として働いていることになる。

「テハ」条件文の「順接」「当然」とされる因果関係については種々の特徴があると考えられるが、残された多くの問題は今後の課題としたい。

注

- 1) 蓮沼1987では「話し手の評価、期待、あるいは世間一般の評価基準などから見て、それに『反する』、といった意味内容」を「反期待性」としている。
- 2) 反復動作の「テハ」は「ちぎっては投げた」は「ちぎったらなげた」のように他の条件の形式で置き換えられないので条件として含めてよいかは疑問だが、とりあえず含めておく。なお、「テハドウカ」の形で提案を表す「テハ」も「タラドウカ」におきかえられるので条件の「テハ」としてよいだろうが、今回は詳しく考察しなかった。
- 3) 他にも主節の動詞の意志性なども問題になろう。
- 4) 前件が「受け身」になると後件のタイプに影響するということは森田・松木1989で指摘されている。
- 5) 三宅知宏氏の御指摘による。
- 6) Aのタイプは宮島達夫先生、仁田義雄先生の御指摘による。

参考文献

- 国立国語研究所1951『現代語の助詞・助動詞』国立国語研究所報告 3
- 小矢野哲男1979「現代語の可能表現の意味と用法（Ⅱ）」『大阪外国語大学報45』
- 田窪行則1989「文の階層構造を利用した文脈情報処理の研究—対話における知識処理について—」『言語情報処理の高度化の諸問題』言語情報処理の高度化研究報告 7, 文部省科学研究費補助金特定研究
- 仁田義雄1982「助詞類各説」『日本語教育事典』大修館書店
1991『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 野田春美1992「複文における「の(だ)」の機能—「のではなく(て)」「のでは」と「のだから」「のだが」—」『阪大日本語研究』4
- 蓮沼昭子1987「条件文における日常的推論—「テハ」と「バ」の選択要因をめぐって—」『国語学』150
- 益岡隆志・田窪行則1992『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 南不二男1974『現代日本語の構造』大修館書店
- 森田良行・松木正恵1989『日本語表現文型』アルク

例文の出典

- (官)=城山三郎『官僚たちの夏・真夏のワンマンオフィス』新潮社,
(続白)=山崎豊子『続白い巨塔』新潮社,

(本学大学院生)